

# ああ、相談業務

～香織（仮名）さんの話～

かうんせりんぐるうむ かかし

11

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

最近特に多くなったように思うが、「子どもをかわいいと思えない」、「産まなきゃよかった」、「施設に預けたい」、「泣くと口をふさぎたくなる」と訴える母親たちに出会うことが増えた。今回はそんなケースから。

## 家族

香織さんは20歳で、夫20歳、長女2歳の三人家族である。香織さんは専業主婦、夫は土木関係のお仕事で、市内の2Kのアパートで暮らしていた。彼女の両親は、同じ市内におり、ともに50代で双方働いている。香織さんには、6つ下の異父弟がいる。実父は彼女が2歳の頃に離婚しており、別れてから会ったこともないので顔も覚えていないという。夫の両親は、車で1時間

くらいのところに住んでいて健在。二人とも50代で働いている。夫には三つ上の兄がいる。兄は結婚し、子どももいるが、疎遠で、義理の父母とも、香織さん夫婦とも行き来はない。

## 相談の始まり

香織さんとの最初の出会いは、1歳半児検診の時である。1歳半児検診は、1歳半を過ぎ、大体1歳7か月くらいの時に行われている。まずは保健師さんが簡単な検査と問診票から、発達相談につなげるかどうかを選別する。発達相談に繋がなくても母親の拒否にあって繋がらない場合もあるが、発達相談に繋がった場合は、言葉の発達や知的発達、運動発達、やり取りからの自閉症スペクトラム傾向の有無などを確認していく。母親は、

発達相談に繋がったことに、やや不満を持っている様子で、しきりに「時間がないから早くして」と訴えていた。こういうことは間々あるので、特に驚きもせず、「お忙しいのにすみません」と謝る必要などないのだが謝りながら話を始めて行く。この場では、子どもの発達だけではなく、当然母親の子への声掛けや関わり方も確認する。1歳半という年齢の子は、言葉もあまり通じない上に、運動能力は上がるし、自我が出てくる時期でもあり、母親が扱いに困り始めるため、怒鳴ったり怒ったりする母親も多い。大人しくさせるために、スマホを出して動画を見せる母親も増えた。

香織さんも、子どもに注意が多く、言葉での指示ばかりで、少し乱暴な感じもあった。香織さん自身は、夏場のこともあり、肌の露出度は高く、男性だったら目のやり場に困るかなと思うような服装だった。一方、子どもの衣服は女の子なのだが、上下紺とグレーで地味だが清潔だし、物の準備などもきちんとしていて、若いお母さんにしては、しっかりしているように見えた。

一通り家族のことなどを聴いて、普段の子どもの様子、かかわり方などを母親担当が聞き、子ども担当が発達検査を遊びながらしていく。その様子を母親と見ながら、子どもの力のあるところなどを伝えて、母親の不安を払しょくしつつ、それでも気になるところをどのように伝えるかを考えていく。子ども担当と母親担当が打ち合わせる時間も場もないので、その場で目配せしながら子どもの発達の様子を子ども担当が伝え、母親担当は、それを受けて家での関り方の良い面やもう少しこうすると良い点などを伝えていくのである。そして、問題なしとするか、2歳時点での確認か、療育（今でいう発達支援センター）につなぐかを判断して母親に伝える。

## 相談経過

このように発達相談に繋がったのは、保健師が、まずはアンケートの結果があまり良くなかった

ことと、健診場面での母親の関わり方に乱暴さを感じたからであった。発達面では特に大きな遅れもないが、やや人間関係が希薄で、一人遊び中心かなと思う程度であったが、香織さんと家族の話やら、家での様子やらを聴いているうちに、「この子、ほんと、みったくないよね？（北海道の方言で「かわいくない」ということ）」「大抵の母親は子どものことめんこい（これも北海道、東北地方の方言で「かわいい」の意）と思うんでしょ？産んでから一度もめんこいと思ったことが無い。」「できれば誰かに育ててほしいけど、仕方ないから世話はしている。」などの言葉が出てきたのである。

1歳半くらいは確かに世話が大変で、かわいいと思っていられるような余裕がないということはよくあるが、「産んでから一度もかわいいと思ったことが無い」という人は少ないのではと思う。生まれてすぐの赤ちゃんは、かわいいというより、小さくて弱弱しい感じがあるが、3、4か月になってくると表情も出てきて可愛さが倍増する。5、6か月になるともっとかわいくなるのだが、動き出すと大変になってくる。それでも5歳くらいのちょっと生意気な時期や、小学校高学年などもっと大きくなってしまおうと、「2歳くらいまでは可愛かった、あの頃に戻りたい」という母親も多い。

生まれてから1歳半過ぎまで一度もかわいいと思ったことはないというのでは、このまま、「ハイ大丈夫です。」で終わらせるわけにはいかない。そこで何とか香織さんとの関係を深めて、更に母親が抱えている何かを確認していく必要性を感じた。そこで、相談員としては、あの手この手で何とか繋ぐわけである。

「お子さんの発達に、大きな遅れはないのだけど、ちょっと人関係が弱く感じるの、遊びの場に来てもらってもう一度確認したいと思うのだけどどうでしょう？」と香織さんにぶつけてみた。案の定「え、それって強制？絶対受けなくちゃいけないの？」と返ってきた。これは想定内である。「強制ということではないけど、これから大変になる時期だし、人との関係性は早いうちに関りを

育てると後が楽になると思います。お母さんも、初めての子育てで、お話の中ではお父さんも、おじいちゃんおばあちゃんも余り手伝ってくれていないようだし、あまりかわいいと思えないということもあつたら、遊ぶのも難しいでしょう。ですから、来てもらって遊びの場で練習出来たら、お子さんも楽しいだろうし、お母さんも少し楽になるかなと思うんですよ。」と続けてみた。

一般的に、発達に遅れがあると療育につなげるが、療育にある発達相談室（筆者が所属していたところ）では、療育の方につなげるほどでもなく、保育園等にもまだ入る予定のない。おおむね1歳過ぎから3歳前までの子どもたちを、多くても4、5人の小グループにして、遊びの中で発達を促す形を作り始めていたので、そのグループに誘ったのである。このグループでは、子どもたちは保育士と指導員が関わって、公園に遊びに行ったり、保健センター内で遊んだりし、母親は母親だけのグループにして筆者が関わるという形にしていた。このグループに来ているお母さんたちは色々で、母親自身の問題を抱えている人もいたので、香織さんにも良いかなと思ったのである。

香織さんくらいの若いお母さんもいたし、やはり子どもがかわいいと思えないというお母さんもいたので、そんな話をして誘ってみた。しばらく、あれこれ説得していたら、香織さんは、「じゃあ、一回だけ行ってみる。でも何も話さないよ。」というので、「そうそう、見学という感じでも大丈夫」と伝え、何とか参加するという事になった。その会はMCG（注）とは違って、虐待予防ではないし、発達的には大きな問題はないが、何となく気になる子のためのグループとしていて、名前も何も付けていなかったもので、いついつどこどこに来てくださいという案内でこの日は終わった。

2週間後くらいのある日がグループの日であった。10時から2時間弱の会である。その日は、子どもが4人、お母さんも4人であった。その中に、香織さんとお子さんもいた。他の3人は、お互いもう顔見知りだったので、「今日は見学に来

てくれた方です。かおりさんでいいかな?」「はい」ということで、皆さんに紹介し、他の3人も名前だけの自己紹介をしてくれた。

子どもたちは、お母さんから離れて遊びに行く。はじめのうちは中々離れないので、広い部屋の中で一緒に活動し、慣れてくると、部屋の外に出ていく。子どもたちが遊んでいる様子を見ながら、お母さんたちと話していく。香織さんのお子さんは、母親にしがみつくと雰囲気はなく、他の子どもたちや遊んでくれる先生の方によって行って、おもちゃで遊び始めた。初めての場なのに、こういう反応であることは、やや心配なケースであると再認識した。

さて、母親グループであるが、だれから話すとか何かルールがあるわけではなく、自由に話したいことを話して帰るという場である。Aさんがここ1か月の話をはじめた。子育てが大変で、疲れたとか、父親に対する不満などに加えて、最近の子どもの様子をあれこれと。続いてBさんが、月1回のこのグループが、心のよりどころになっていると言ってくれた。そしてCさんは、もともとあまり話さない方なので、うんうんとうなずきながら、「うちも同じです」と一言話した。お母さんたちの話から、筆者がいくつか拾い上げて、その場の会話を作っていく。子どもの問題行動の話、食べない、寝ない、目が離せないという話が続く、こういう時どうしたらいいんだろうという話も出る。だんだん慣れてくるとお母さんたちの本音が出てきて、「いやあ、もう、どこかに預けたいと思うわ」と誰かが言ったときに、それまで、何となく、話を聴いているだけだった香織さんが、急に「私もだ!」と口を開いた。他の3人も、やっと口を開いてくれた香織さんの方をみると、すかさず「そうだよねえ」と相槌を入れてくれた。やっと香織さんも入り込んでくれたし、他の3人も受け入れてくれたのである。そこからは、香織さんも気を許し始め、父親の話や、舅姑の話などもし始めた。基本的には愚痴である。

子育て中のお母さんたちは、あまり褒められたり認められたりすることが無い。このグループは

頑張っているお母さんたちを労う場でもある。香織さんも含め、今日参加してくれたことに感謝し、またお母さんたちの頑張りをほめ、認めてお帰りいただく。これは必ず最後にするのであった。

また、子どもたちを見ていた保育士さんと指導員さんから、今日の子どもたちの様子、前回からの変化などを細かく伝えていく。そうすることで、またお母さんたちが1か月過ごせるのである。

このようなグループに来ているお母さんたちは、グループだけではなく、個別に相談を受けることもある。香織さんが帰るときに、今日の感想を聞いてみた。すると、「同年代の母親と話すことが無かったので、面白かった」とのこと。「だったらまた来る？」と誘ってみると、「うん」とのこと。次回については最後に皆さんに伝えているので、香織さんも了解済みだ。そのうえで、「もし個別に相談したかったら、それもできるからね」と伝えてこの日は終えた。香織さんは子どもを産んだのが早いので、友達はまだ専門学校生だったり、働いていたり、中々話をする機会がないとグループの中で話していたので、話せてよかったのかなと単純に思っていた。

その後、月1回のグループに3回ほど参加し、他のお母さんたちの話を聴いて頷いたり、同調したり、時には、「ええ～、そんなことできないなあ」と他のお母さんみたいにはできない自分を吐露したりしていた。

ここまで来てようやく、香織さんから、相談したいことがあると個別相談の申し込みがあった。日程を調整し、発達相談室で相談を受けた。

香織さんが来た時には、子どもは保育士に見てもらって、香織さんと筆者だけで話を聴いた。「なした？なんかあった？」と気やすい感じで聞くと、「実は、自分自身のことを聴いてもらいたくて・・・」と香織さん。「うんうん、何でもいいよ。話してみても」と促す。

香織さんが話したことは、自分がどのような育ちをしたかである。実母から、香織さんはあまりかわいがられなかったという。2歳ころに実父と実母が離婚したことは聞いていたが、実母からよ

く「あんたは、父さんに似ていてかわいくない」と何度も言われたという。小さい時は良くわからなかったが、幼稚園くらいの時には、「かわいくない」という言葉が嫌だったという。「そりゃそうだよなあ。かわいくないなんて言われたら辛いよね」と返しながらかつきを聴く。「新しいお父さんが来たのが、自分が小学校に上がる時だった。ちょうどそのころ下の弟が生まれた。弟ができたのはうれしかったけど、新しいお父さんは好きじゃなかった。なんでこの人、この家にいるんだろう。お父さんと呼べと度々叱られたけど、中々お父さんと呼べなかった。呼べるようになったのは3年生くらいかな。」と話は続いた。

そうか、やはり香織さん自身、実母から可愛がられて育っていなかったのだ。弟の面倒を見させられ、しっかり見ないと叱られたとか、かわいい洋服を着せられたけど、それが嫌だったとか、養父からは、家の手伝いをしなかったとか、弟に意地悪だとかで叩かれたという。弟は可愛くても家にいるのが段々辛くなり、早く家を出たいと思うようになった。そして高校を出てすぐ、家を出て働き、すぐ今の夫と知り合い、子どもが出来て籍を入れたという。お産の時も実母に来てほしくなかったが、勝手に押しかけて来たこと、しかも、初孫の長女を初めて見た時に、「みたくない」と言ったのである。自分自身のことと、子どものこと両方を否定され、香織さんは深く傷つき、我が子をかawaiiと思えなかったのである。そんな話を聴き、辛かった日々に思いを馳せ、辛い、香織さんは十分可愛いし、お子さんもとっても可愛いということを改めて認識してもらった。母親としてもしっかり出来ていることも、グループの中でも認められていることも、そして、何より、お子さんをかawaiiがっているということをあえて伝えた。余り十分にかかわれていなかった香織さんだからこそ、可愛がっている、上手にかかわっているとプラスに伝えることが必要だから伝えた。すると香織さんはその場で大泣きをし、泣き終えた後、とてもすっきりした顔になった。それ以来、グループの中での香織さんの表情は、更に

明るく、かわいらしくなり、お子さんも、とても可愛くなって、香織さんのところになにこしながら飛びついていくようになっていった。香織さんもお子さんとままごとなどの遊びを上手にするようになっていった。その後半年ほどグループに参加したところで、香織さんが働くためお子さんを保育園に預けることになり、終了となった。

## まとめ

本ケースはわずか1年足らず、しかも数回の関りで、お子さんの人関係も、母親である香織さんとお子さんとの関係も一気に改善していった珍しいケースでもある。大抵はもっと時間がかかる。このケースでは、香織さんが、自分自身のことを誰にも言えぬまま抱えてきて、それを一気に吐き出すことが出来、更にグループの力も相まって、短期で終了となったのだと思う。

自分の子どもをかわいいと思えないという母親の多くが、自分自身を好きになれず、自分自身が実母や実父から大事にされなかった経験のある人だと経験から思う。自分の家族関係が大きく影響していて、兄弟間差別があったりすると、下の子に対してかわいいと思えないとか上の子がかわいいと思えないなど、自分自身がどういう立場だ

ったかで同型伝達するように思える。子育ては大変な大仕事である。そこに、自分自身の生い立ちが影響するのであれば、子育て中の母親の支援が次の世代の子育てにとっていかに大事かがわかるだろう。今日の前の母親を救うことが次の世代の子育てを救うのである。

このケースは MCG などが始まる前の話なので、グループを始めたのも、グループダイナミクスだとか集団療法だとか、そんな大仰なことではなく、ただ単に、母親たちが愚痴を言える場所を提供し、子どもたちも小さなグループの中で人関係を育てるといった試みでしかなかったが、やってよかったと今も思う。

注：MCG とは、Mother and Child Group のことで、子育てに悩みを抱える母親たちが、同じように悩んでいる仲間と出会い、その思いを吐き出し、人の話も聴いて、決して自分だけではない、自分がおかしいのではないという気持ちになって、孤立感を防ぎ、また日々の子育てに穏やかに臨めるようにしていくためのグループのこと。ピアカウンセリング機能を持つ。虐待予防の対策として、東京都南多摩保健所がスタートし、子どもの虐待防止センター、保健所、保健センターなどで開設されている。